

麦作情報 No. 3

令和4年3月2日
西松浦農業改良普及センター

1. 気象概況

月	半旬	平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間	
		平年値	本年値	平年値	本年値	平年値	本年値	平年値 mm	本年値 mm	平年値 時間	本年値 時間
2月	1	5.3	4.1	9.9	7.8	0.9	-0.2	12.2	0.0	19.1	12.2
	2	5.7	5.6	10.4	9.3	1.1	2.1	13.1	0.5	20.0	19.2
	3	6.2	7.2	10.9	12.3	1.5	3.2	15.5	6.5	20.7	23.1
	4	6.6	3.4	11.5	6.9	1.9	-0.1	17.1	16.5	21.9	20.7
	5	7.2	2.8	12.2	7.1	2.3	-2.6	18.6	0.0	22.8	37.6
	6	7.8	7.6	12.7	14.4	2.9	-0.5	16.5	0.0	18.4	25.4

- 平均気温は、2月3半旬を除き、0.1～4.4℃低く推移している。
- 降水量は、1月の平年比55%に続き、2月も平年比24%と非常に少ない。
- 日照時間は、2月1～2半旬はやや少なかったもののその後回復し、2月の日照時間は平年の111%となった。

2. 生育概況

- 播種以降、気温が低く乾燥状態が続いているため、生育は平年並み～やや遅くなっている。
- 特に12月以降に播種した圃場では、葉齢の展開が遅れ分けつの発生が少なく、生育がやや停滞している。
- 大麦網斑病は、現在目立った進展はみられていないが、今後気温の上昇や降雨により発生が助長される可能性があるため注意する。

《麦類の生育状況（3月2日時点）》

- ① 11月18日頃に播種された圃場では、現在茎立ち期を迎えている
- ② 11月27日頃に播種された圃場では、現在幼穂長約4mm、節間長約5mmで節間伸長始期を迎えている。
- ③ 12月上旬頃に播種された圃場では、現在本葉6葉目が展開中（5葉期）

3. 今後の管理

1) 肥培管理

- 播種時期により管理が異なるため、下記を参照にする。
 ※地力がある圃場（堆肥連用田など、令和3年産麦で倒伏した圃場等）では、麦の生育量および葉色から判断して施用量を減じるなど調整を行う。

①11月15日頃播種

→茎立ち期を迎えている。

麦踏みは行わず、土入れ中心の管理とする。

穂肥を施用していない圃場では、速やかに穂肥を施用する。

②11月27日頃播種

→節間伸長期を迎えており、まもなく茎立ち期を迎える。

今週を目途に穂肥を施用する。

※ハーモニー75DF 水和剤は、散布晩限を迎えているため使用しない。

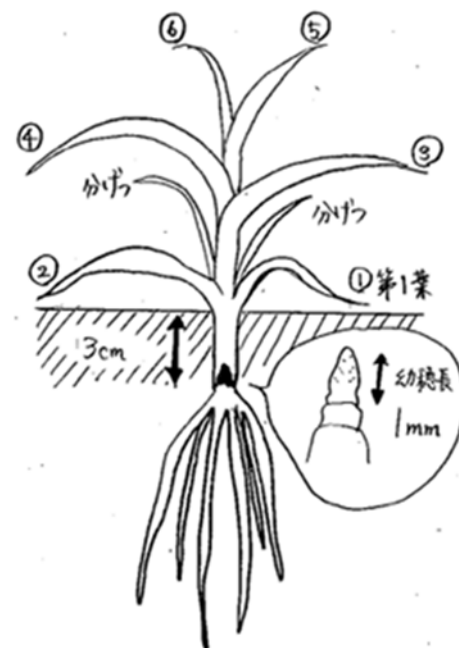
③12月上旬播種

→4~6葉期を迎えている。

麦踏は来週中ごろまでとし、土入れ中心の管理とする。

3月中旬を目途に穂肥を施用する。

幼穂形成始期（麦 5.5L ~ 6.0L 頃）



2) 排水対策

排水対策については、麦作情報 No.2 を参照（西松浦農業改良普及センターHPに掲載）。

3) 麦踏み、土入れ

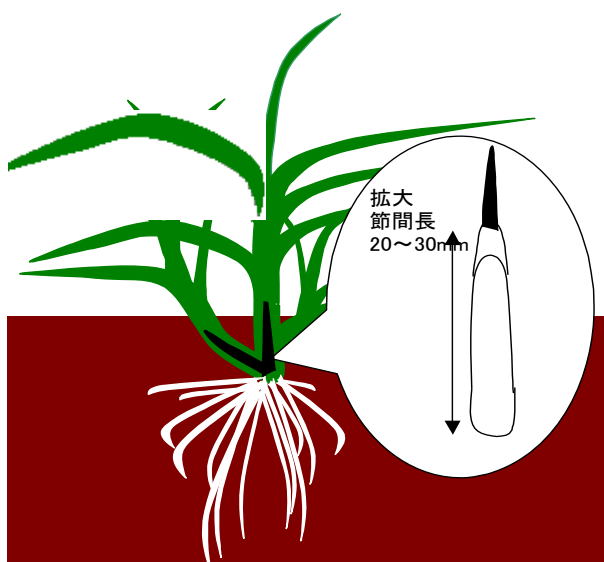
- 必ず圃場が乾燥した状態（畝間が白乾している状態）で、麦踏み（3葉期以降から）や土入れ（5葉期以降から）を実施する。
- 土壤水分が高い状態で麦踏みを行うと、土がしまり湿害による根痛みを起し、マイナス要因となる。（土を手で握り、湿った状態であれば、無理な麦踏みは避ける。）
- 草丈が30cm 以上になると、麦踏みを行うと完全に立ち上がりきれず、その後倒伏しやすくなるため麦踏みは行わず、土入れ中心の管理を行う。
- 麦踏み、土入れの効果については、麦作情報 No.2 を参照。

【節間伸長期】

茎の節間が5mm となったとき（葉齢は7葉期）。
節間が伸長し、幼穂が地上部近くに上がってくる。

【茎立ち期】

節間伸長期から2週間程度経過した時で、節間が2cm に達し、幼穂が地上部に上がってきたとき。
この時期になると麦踏はできない。
茎立ちが早いときなどは、幼穂凍死を避けるため土入れを実施する。



茎立ち期

4) 雑草防除

- 水稲刈り取り後雑草が繁茂していた圃場、耕起前の防除が不十分であった圃場では、スズメノテッポウ、カズノコグサ、タデ類、トゲミノキツネノボタンなどの発生が散見される。
- 土入れによる雑草防除を実施するとともに、こまめに圃場の雑草発生状況を把握し、除草剤の処理時期を逸しないよう対策を徹底する。
- 除草剤効果を保つため、雨前を避けて散布する。
- カラスノエンドウは収穫時に混入する危険性が高いため、アクチノール乳剤による防除を徹底する。
- 「ハーモニー75DF水和剤」の使用時期は「播種後～節間伸長前まで」なので、使用の際は麦の生育状況に注意する。カズノコグサの防除は播種直後処理剤と「ハーモニー75DF水和剤」（カズノコグサが1～3葉期までに）との体系処理で行う。

※カズノコグサとスズメノテッポウの識別については、[麦作情報 No.2](#) を参照。

除草剤散布後は、以下のことに注意する

- ①「麦踏み」は、除草剤散布後に薬剤の影響で葉が黄色くなっている場合、麦へのダメージが大きいため、散布後1週間は控える。同様の理由で、麦踏み直後の除草剤の散布も控える。
- ②「土入れ」を、除草剤散布後すぐ行くと、雑草の蒸散作用が抑制され有効成分の根吸収が妨げられるので散布後1週間は土入れを控える。（特にステージの進んだ雑草の場合は十分に間隔をあける）

○播種後除草剤が散布できていない圃場や、雑草の発生がみられる圃場では、除草剤の処理時期を逸しないように早めに茎葉処理剤を施用する。

農薬名	効果のある雑草	使用量	希釈水量	使用時期	総使用回数	使用上の注意事項
ハーモニー75DF水和剤	イネ科雑草 ・双メテッポウ ・加ノグサ 広葉雑草 ・ヤムグラ ・アザ ・ハバ ・トゲミノキツネノボタン	5～10g/10a	100L/10a	播種後～節間伸長前 ※カズノコグサに対しては、 麦1葉期～節間伸長前	1回以内	<ul style="list-style-type: none"> • 播種後にハーモニー細粒剤Fを散布された圃場では使用できません。 • 薬害が生じやすいので周辺作物への飛散に注意。 • 使用器具の洗浄を入念にし、他作物との併用はしない。 • 双メテッポウ、加ノグサには効果が弱い（抑制するが枯死しない）
アクチノール乳剤	広葉雑草 ・ヤムグラ ・加ノグサ ※イネ科雑草には効果がない	100～200ml/10a	70～100L/10a	穂ばらみ期まで （雑草生育初期）	2回以内	<ul style="list-style-type: none"> • 広葉雑草多発田に使用し、ヤムグラ、加ノグサに効果が高い。 • 湿度に左右されず使用できる。 • 散布後、20日程度で枯死。 • 接触剤なので、必ず雑草の茎葉に散布する。 • 気温が高い日の散布は薬害が生じるので注意が必要。

5) 病害虫防除

○網斑病

- 近年、網斑病の被害が拡大傾向にあるため、薬剤防除を徹底する。
- 本年は、管内では網斑病の発生は少ないものの、12月27日に初発が確認されているため、今後の発生状況に注意する。

- 網斑病が多発した場合、収量が**3割程度減収**する可能性がある。
- 現在、網斑病の多発生がみられる圃場においては茎立ち期にチルト乳剤、出穂期にシルバキュアフロアブルによる防除を行う。

(※チルト乳剤の大麦に対する使用回数は1回までなので、**農協のヘリ防除を利用する場合は、出穂期頃にチルト乳剤散布となり使用回数を超えてしまうため、茎立ち期にチルト乳剤の散布はできない。その場合は、茎立ち期にシルバキュアフロアブルを散布するなどの対応を検討する。**なお、チルト乳剤およびシルバキュアフロアブルの使用にあたっては、網斑病に対する無人航空機による散布の登録はないことに注意する。)



写真1 大麦網斑病の病斑

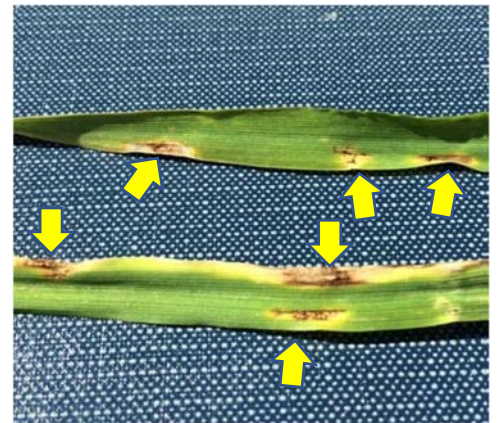


写真2 大麦網斑病の病斑

【防除薬剤使用基準】 (対象作物は大麦)

薬剤名	適用病害虫	希釈倍数	10aあたり 散布量	使用時期	使用回数	散布方法
チルト乳剤25	網斑病	1000倍	60~150L	収穫21日前まで	1回	散布
シルバキュアフロアブル	網斑病	2000倍	60~150L	収穫14日前まで	2回	散布

6) 鳥獣害対策 (カモによる食害) ・酸性土壌による障害

鳥獣被害対策および酸性障害については、麦作情報 No.2 を参照 (西松浦農業改良普及センターHPに掲載しています)。

R4年産麦類生育期間気象グラフ

アメダス観測値（伊万里）

西松浦農業改良普及センター

